



日本文学全集 32



丹羽文雄

恋文 青麦 庖丁



河出書房

日本文学全集 32 丹羽文雄



© 1974

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和45年2月20日 初版発行
昭和49年8月30日 5版発行

著者 丹羽文雄
発行者 中島隆之
印刷者 和田彰三
装幀 原弘
印刷 刷・東洋印刷株式会社
製本 本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替いたします
定価はカバー・帯にあります

目次

恋文……………三

青麦……………三三

庖丁……………三三

年譜……………四一

文学入門……………四七

作家の横顔……………四七

中村八朗……………四七

恋

文

山の湯

一

溪流にのぞんだ、三階建の旅館であつた。

玄関まえをふさいでいた大型バスが、うごきだすと、

「二列に、整列」

おりた客のなかから、いまだきめずらしい号令があがった。

男ばかりで、二十人あまり、二列に整列をはじめた。

はきはきと、たのしそうに、ひじをまげたり、右へならえをした。どの顔も三十歳をこえていた。

灰色、黒、こげ茶と、おもいおもいのオーバーに、おりカバンや、ポストン・バッグをさげていた。

「番号」

先頭のが、力づよい声で言った。

「一」

やせて、長身であつた。真弓礼吉である。ひろい額と、肉のうすい骨ばった鼻が、かれの性格をかたつていようようにみえた。

「七」

「八」

旅館の女中や、番頭は、あきれ顔でながめていた。

番号がおわると、

「玄関にむかつて行進」

号令をかけているのは、山路直人であつた。かれは、急に、一段と声をはりあげた。

「歩調、とれ！」

二十一名のオーバーのすそが、いさましくはねあがつた。もものつけ根から、ひざがしらが水平になるほどに、足をあげた。三十すぎの男が、わきめもふらず、あいている右手を、大きくふった。

しかし、玄関の式台にたどりつくと、兵隊ごっこはくずれた。

「あつははは」と、腰をかける。

「年に一度の教練だ」

「稚氣満々、無邪氣でよろしい」

「はっははは」

「だけど、保安隊とか、警備隊にまちがわれそうだよ」

「とんでもない、それは、こまる」

めいめい勝手なことをしゃべりながら、靴をぬいだ。真弓礼吉と山路は、ほとんど同時に、休憩室の広間にはいった。

電蓄のそばのなが椅子に、ふかくからだを沈めていたアベックの若い女が、おやと、身をおこした。黄いろの、エリつけなしのハイ・ネックのスウェーターを着ている。

女は、青い目の兵隊に、なにか言った。兵隊は、うなずいた。見つけられたらしかたがないというふうに、女が立ってきた。

「こんなところで、先生に出くわそうとは、おもいがけなかったわ。わるいことは、できないわね」

と、山路とむかいあった。

真弓礼吉が不審そうに、女と山路をかわるがわるみた。

「大丈夫だ。知らない顔をしていてあげるよ」

と、山路が言った。

「おねがいよ、ね、先生。あたしの仲間にいわないでね。うるさいんだから……だから熱海をさけて、箱根にしたのよ。先生に会うなんて、皮肉ね」

二

山路は、なが椅子の、青い目の兵隊をちらりとながめ

て、

「君はべつに、わるいことをしているつもりじゃないだろう」

と、女にかぶさるようにして言った。

女は、四尺八寸にもたりなかった。

「秘密は、まもつてあげるよ。ところで、あの、君のあたらしい恋人、日本語は？」

女が、大きな声にだした。

「大丈夫よ。日本語は、チンプンカンプン。もうすぐ、朝鮮へかえっていくの」

女は信頼をこめて、なにかも山路にうちあけるといった調子であった。

青い目が、不安そうに、こちらをながめていた。

女は、休憩室の大勢な客をながめやった。

「先生たち、団体できたの？ みんな、先生のお弟子？」

「弟子じゃないよ」

「そうね、そういえば、先生よりふけた顔もいるわね。なんのあつまり？ いまさつき玄關まえでなにをしたの。子供みたいに足をあげたり、手をふつてさ……？」

このあいだに、番頭から、部屋のわりあてがいいわたされていた。三人、五人と小さくわかれて、女中に案内され、室をでていった。

「同期生の会合だよ。毎年一度の同窓会だ。小学生の遠

足のように、みんなよろこんでいるのでね」

と、山路がわらう。

女は、青い目の兵隊のそばへもどっていった。

「真弓さんと、山路さんと、加納さんは、三階の、水仙の間でございます」

番頭が、二度くりかえした。

階段をのぼりながら、真弓礼吉が言った。

「なんだね、あの女？」

「君がみたとおりの女だよ。行儀はわるいが、しかし人間は、いいんだ」

「いや、そういう意味ではない。君のようなひとが、どうしてああした種類の女性と、したいのかということだ」

山路は、たちどまった。苦笑をもらした。そして、二階から三階への階段をみあげた。

「ぼくが、あのひとたちの客になるのではない。あのひとたちは、ぼくのたいせつなお客さんだ」

「お客さん？」

「あのひとたちに、ぼくは、とても、たいせつにされているよ。感謝されているのだ。そしてまたぼくの生活が、そのことによって、なりたっている」

「なにをしているのだ。どういう仕事か」

「いずれ、あとで、くわしく説明するよ」

水仙の間にとおると、礼吉と山路は、谷川に面した縁側の繚椅子ちやうに、腰をかけた。

女中が、三人ぶんの丹前にゆかたをかさねておいてから、あとのひとりを迎えに、部屋をでていった。

「ときに、君のさがしていたひとは、まだみつからないのか」

と、山路が、むぞうさに言いだした。

礼吉が、よわよわしく首をふった。

「終戦以来、君はさがしている。結婚もしないで。あの当時そのひとが二十歳であったとしても、いまじゃ二十八だろう。相手が結婚しているともかぎらないのに、君もずいぶんものずいだ」

三

「ぼくの人生は、あのひとをさがしただけに、意義があるのかもしれない。君からみたら、さだめし、こっけいだろう。まぬけているだろう。しかし、ぼくは、そのことだけを、こころのよりどころとしているのだ」

たちまち、礼吉の胸はせつなくなつた。そつと、こころの奥にしまっておきたいことであつた。

しかし、ふれられたくもあつた。

礼吉は、着がえをはじめた。誘われて、山路も服をぬいだ。

廊下は、ようやく、騒々しくなった。

階下の大湯は、かれらに占領された。湯船は、まん中につくられていて、腰までのふかきで、湯はたえずあふれていた。たがいはだかを、みくらべている。

「キサマとはよく、背中のながしっこをしたじゃないか」

と、それでさっそく、ながしっこをはじめめる組もあった。

溪流は、湯殿よりはるかしたのほうを、流れているらしかった。濃い湯けむりが、たちのぼっていた。溪川のどこかに、湯のわき出るところがあるという。湯けむりは、樹々の枝葉をかすめて、すばやく、なか空に消えていく。

宴会のはじまるころには、山の宿は、ゆうやみにつまれた。

席次はきままっているような、きまっていないような、それでいて毎年すわる場所はきまっていた。

いちばん上席に、山路直人がすわった。山路の態度は、莊重で、ひじょうにももの静かなところがあった。兵学校の当時から、かれはおのずと、仲間をリードした。学問上のことにしろ、対世間のことにしろ、終戦後はことさら、処世上の相談やら、家庭内のいざこざにしろ、あらゆることについてのかれの意見には、権威があっ

た。人生経験のゆたかな重みがあった。

山路もおなじ三十二歳であったが、五十歳の思慮をそなえていた。

山の芸者が、三人、おしゃくにあらわれた。どれもとしをとっている。芸者のたりないところは、宿の女中が、おしゃくにまわった。

山路が、たちあがった。

山路が、かんとんないさつをすませてから、

「戦死せる同期生にたいして、一分間のもくとう」と、言った。

芸者も女中も、一分間はうなだれた。

トラックがとおるらしく、旅館全体が、かすかに震動した。

酒になると、

「おい、石谷、近況報告しろ」

と、声がかかった。

「石谷が、どうかしたのか」

「あいつ、横須賀のキャバレーで、ピアノをたたいてるそうだ」

「へえ、器用な奴め」

石谷とよばれたのが、虚無的ながわらいを、うかべていたが、やがて、言った。

「あそこのダンサーは、ほとんど戦争未亡人か、軍人の

娘なんだ。いい気になっておどっているからね、オレは時どき、不意に、軍艦マーチをやつてやるんだ。しゅうんとなつてしまふね。ぎよつとするのかね。気がとがめるのか。とたんに、しおれてしまふんだ。相手はなにも知らずに、マーチをよろこんでいるがね」

四

「石谷の話を、君はどうおもう？」

と、山路が言いだしたのは、宴会もとうに終り、宿全体がしずかになつた十二時すぎの、大湯のなかであつた。

相手は、礼吉だけであつた。礼吉は言つた。

「石谷の気持は、わかる。未亡人や娘たちの、うろたえる気持もよくわかる。なにも女たちは、すきこのんで、青い目の兵隊とおどりはないだろう」

山路は、じつと考えこんでから、つぶやいた。

「石谷にしたつて、まさか、海上警備隊にはいる意志はもつていない」

礼吉は、なんともこたえなかつた。

「未亡人といえ、染川の細君は、どうしているだろうか。なんとかいうひとだつたね」

「道子さんだ」

と言つて、礼吉は、目をとじた。いきなり、胸にあふ

れるものがあつた。

「ぼくたちは、たいてい、終戦後になつて結婚をした。あの当時、細君をもらったのは、かぞえるほどしか、クラスにはいなかった。皮肉なことに、細君もちが、ほとんど戦死した」

山路が、礼吉のハラをなかとおすような眼差になつた。

「なにも聞いてないのか。染川の未亡人のことを？」

おだやかに、礼吉は山路をかえりみた。それは、表面だけの、つよがりだつた。内心では、くるしいほどに胸さわぎがした。

「どうしているかね、ぼくは、知らないよ」

「そういえば、君と染川の細君は、おなじ町の出身だつたらう？」

「ぼくの生れた家は、終戦の年の、最後の爆撃で、きれいさっぱりと焼けてしまつた。あのひとの家も、あとかたもなくなつた」

「染川と君は、親友だつた。親友の未亡人だ。すこしは、こころにかけていろよ」

礼吉の顔が、苦笑をうかべそうになつたが、中途できえた。

ふたりは、しばらく湯船のふちに、あたまをもたせかけて、手足のちからをぬいていた。

湯殿のガラス戸に、ぬりつけたようなやみが、せまっていた。

「仕事のほうは、どうだ」

からだをうごかさずに、山路がものしずかにきいた。

「あいかわらずだ。受験講義録の下うけ仕事だ。めし代にも、たりないよ」

「弟さんと、いっしょにいるのか」

「弟がいなかったら、とうに、うえ死してゐるだらうね」

「どうだ、ぼくの仕事を手つだわらないか」

「君の仕事？」

「仕事先を、渋谷のマーケットのなかにもっている。君は、英語以外に、フランス語もできる。それが、大いに役にたつのだよ。ぼくのところへこい」

「なにをするのだ」

「まあ、いい。くれば、わかる」

礼吉が、からだをおこした。ひどくその話にさそわれたいらしい礼吉の態度に、山路は満足なようすをみせた。

「ぼくの店につとめたところで、君が、例の女性をささす邪魔にはなるまい。また、なにかと便があるかもしれないよ」

美麗荘

一

ありあわせの材料で、いそいで建てたものらしく、このアパートは、終戦以来の年月にしては、いたみかたがひどすぎた。七八室のよりあつまりで、各室の出入口が、めいめい勝手なところについていた。

半間の出入口には、洋風のとびらがあり、ひき戸もあり、すりガラス戸もあり、格子戸もありというふうに、まちまちである。

各室のさかいは、ベニヤ板であった。天井が、たかいた。天井は、なかだるみをしていた。おもての羽目板は、ほとんどが、そりかえっていた。

美麗荘とは、よくも名づけたものである。

幸い、真弓兄弟のかりている八畳は、東側に、一間の窓をもっていた。ガラス戸だけで、雨戸はなかった。

共同便所は、別むねになっていた。コンクリートの、すこし傾斜した通路がついている。この通路の右側が、共同せんたく場であり、左手に、三畳の部屋がくっついていて、そこには、若い自動車の運転手の夫婦が、すまっていた。

真弓兄弟の部屋は、がらんとしていた。調度品らしいものが、ない。床の間も、なかった。ずんべらぼうな、まっ四角な部屋は、もと、なにかの倉庫ではなかったかと疑わせるほどである。半間のつき出しができていて、そこが洗面所であり、台所になっていた。洗面器とナベが、同居している。コップのなかには、歯ブラシと、ハシがいつしよにはいつている。カーテンで、この半間のつき出しは、かくされていた。

隣室のラジオが、こちらの室のラジオのように鳴った。くらしのもようは、つつぬげである。聞かれて、わるいような話は、していない。聞いたつて、しようがない。聞いているほうが、バカげているような種類の、日常会話に、礼吉はいつか、無神経になった。

こちらの意志にうったえてくる音響以外の雑音は、苦にならないものである。電車やバスの雑音は、苦にならないが、広告塔の声には、がまんがならないものである。

「真弓さんとこは、いつも、おしずかですね」

たまに顔をあわせると、隣室のおかみが、おあいそをいう。小さい子供を、四人もかかえている。うるさい物音をたてないところには、生活がないといわんばかりのおかみの口ぶりであった。

礼吉は、つとめて、アパートの人々と顔を合わささないようにしていた。

口をきくのが、おつくうだった。かれは、ほとんど一日、ひとりであった。

「おたかくとまっているよ」
と、かけ口をきかれた。

自尊心がたかいせいだった。超然としているつもりはないのだが、ひとには、そうみえた。

「兄さんは、死んだおふくろみたいに、しよっ中うちのなかを掃除してないと、がまんができないんだね」
と弟の洋がわらう。

「お前は、また、ゆくさきさきで、ものを取りちらかして、お母さんに小言をいわれていた死んだお父さんに、よく似ているよ」

「ぼくは、ねるときだけ、この部屋にかえってくるのだから、兄さんの気のすむようにしているが、いいよ」

今朝も、かんたんな食事がおわると、洋はとびだした。

二

朝はやく、洋は、大きめなおりカバンをさげて、美麗荘をでていく。毎日、きまった方向に、足をむけるというのではなかった。

小柄で、筋肉質であり、小きざみに、せかせかとした歩き方をする。かれの仕事先は、東京都内の、全域にわたっていた。

かれは、中央線の電車に、乗っていた。途中の駅に、おりる。いそぎの用をもったひとのように、改札口をとおるぬける。せかせかと、駅まえの雑踏をあるいて、とある路地の古本屋にはいつていく。

東京都内の、めぼしい古本屋の住所は、かれの頭のかなかに、たたみこまれていた。どこの店の、どちら側のたなには、どういう種類の本がならべてあるか、暗記をしていた。

かれの目は、油断をしなかった。みおとすということが、なかった。書だなをなでるようにながめる時のかれの両眼は、獵人になった。

珍本に類するものを発見したとしても、洋は、いきなりは手を出さない。血色のよいシワがきざまれた、厚味のある、あかるいくちびるを、がまんづよく結ぶのである。

それから、やおら手をだした。それは、失望をしない用心のためであった。定価表をみる。

予想どおりの相場の場合は、かれは、またもとの書だなにもどした。相場よりもやすい場合は、

「どうです、景気は？」と、こころやすく口をきき、店の主人のところにもつていく。「ちかごろ、どこの市でもお目にかかりませんね」

同業者には、びんとわかるものがあつた。洋はつねに、上等の服をきていた。相手に、貧相な印象をあたえ

てはならなかった。高級な背広も、いわば、商売のものであつた。

原則的に、同業者に売る場合は、定価の一割引ということになつていった。

洋は、次の古本屋をめざして、せかせかと歩いていく。電車に乗る。バスを、利用する。

この仕事のためには、かれは、あらゆる種類の本に精通していなければならなかった。つまり、くろつぽいもの（法律、経済、技術書など）しろつぽいもの（文学、美術書）そのどちらの本の相場も、おぼえていなければならぬ。

古本屋から古本屋へかよう途中に、ふたをあけたばかりの銭湯をみかけると、洋は、ところかまわずに、とびこんだ。

そのため、おりカバンには、セッケンとタオルが、用意されていった。

「しよつ中とびあるいていて、それでよく商売になるんだね」

と、礼吉があきれるのだった。

「とびあるくのが、商売だよ、兄さん」

「なにか不正をはたらいているように、おちつきがない」

「とんでもない。立派な職業だ。セドリというんだ。都

内には、二三十人のセドリがいる。古本屋から古本屋をかけずりあるいて、やすく買った本を、神田の市場で、相場の値で売るのでよ。日に千円はもうかる。しかも、税はかからない。店をもつ必要はない。カバン一つあれば、よるしい。努力はあるが、うまい商売だ」

小柄な全身に、生活力があふれていた。

三

半間はばの、せまい台所のタナには、つねに、ふた品ぐらゐの食料品が、ならんでいた。らっきょうのびん詰だの、のりのつくだ煮の類である。

その内、どれか一つがなくならなければ、補充をされなかった。イクラのびん詰があらわれる時もあり、梅干の場合もあり、伊勢四日市の、はまぐりの時雨煮のこともあった。

女のように、たべものに気をつかうのが、洋の役割である。

他に、バターの半ポンドずつは、きらしたことがなかった。それに、上等のコーヒーである。

兄弟は、いまだに、はんごうで、ごはんをたいていた。ふたりが一しよに食事をとるのは、朝だけにかぎられていた。

ちやわんを洗うのも、洋のうけもちであった。たくあ

んをきざむのも、洋である。兄の礼吉は、それであたりまえだという顔をしている。そうされることに、なれていた。

最初に、女房役を買ってたものが、一生の負けであった。そういう役割を宿命のように、洋は感じていた。不服はいわなかった。

ひると夜の食事を兄がどんなふうにすましているか。子供ではないのだからと、洋はすてている。

コーヒーと砂糖が、いつも、台所のタナにあるものと、礼吉は考えているらしかった。

ただし、洗濯には、困った。

なにもかも、クリーニング屋にだすというわけにはいかなかった。余儀ないものは、深夜、礼吉は洗濯場で洗った。洗ったものは、部屋のなかに、つなを張りわたして、つるさげた。

「うらの空地へ、みんな干しにだしてるじゃないか。部屋のなかでは、かわきがおそいよ」

と、洋がいった。

「パリにいろとおもえばいい。あそこでは、クリーニングが間にあわないので、日本からいった人たちは、みんな、自分で洗濯して、部屋のなかにつるしておくという。表通りのホテルでは、窓の外にだすわけにはいかないのだからね」

アパートのおかみ連とまじって、うらの空地のものほし場で、さるまたの洗濯したのをほすわけにはいかなかった。礼吉の気ぐらいが、ゆるさなかった。

「なにかと不自由だ。兄さんも、はやく結婚することだね」

結婚をもちだされると、肉のうすい、高い礼吉の鼻が、いつそうさむざむとしてみえるのも不思議であった。ぐつと、のどをふさがれる衝動をおぼえるらしかった。

「ぼくには、結婚の資格がないよ」

「資格は、あとから、いくらでもつけられる。兄さんが結婚をためらっている原因は、他にあると、ぼくはにらんでいる。兄さんの語学力をもってしたら、妻子をやるうことぐらいは、ごく簡単だ」

英語とフランス語にたんのうな兄の才能には、洋は、驚異をまじえた尊敬をほらっていた。

「兄さんだって、生活力はそなわっているのだ。しかし、兄さん自身が、それをつかわない。つかわさないものが、他にあるからだ」

「なに、そんなものがあるはずはない」

「兄さんは、目下、裏側だけで、くらしているみたいだ」

「裏側？」

四

「兄さんのところの大部分は、他のところにあずけてある。秘密をもっているといつてもよい。だから現在の兄さんは、ぼくのあてがいぶちにも、苦情をいわないのだ。じぶんのほんとうの生活は、他目のために、しまつてある」

「それじゃ、半分でしか、ぼくは生きていないみたいに聞えるね」

よわよわしく苦笑をする。が、本人も、それをみとめている口調であった。

「海軍時代の兄さんは、そんな兄さんではなかった」

「あの当時は、死ぬことだけに、意義をみいだしていた」大時代なものいい方を、かれは、すぐ、その口の下から恥じた。「終戦を生きてむかえて、ぼくは、生きる意義をみうしなつてしまったみたいだよ」

「兄さんの秘密を、しいて聞きだそうとはおもわないよ。兄さんのほうから、すすんで話してくれるまで、ぼくは待っている」

もつとも、こんな会話を、たえずくりかえしているというのではなかった。

留守番の礼吉は、粗末な机にむかつて、受験講義録の原稿を、せつせと書いていた。